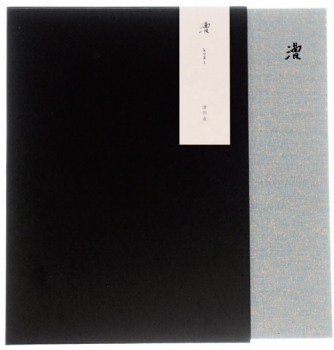
晴レルデ



「漕」の黒いケースは闇を、
水色の表紙は琵琶湖を表現している

闇の中、
松の上に懸かる月の写真に、
マリさんは涙した

「物語」をつかむ旅路へ

アサヒ精版印刷ならではの仕事の一つに、作品集がある。この連載の最初で紹介したピンホールカメラの写真集のようなクオリティーの高さ、細部まで神経が行き届いた凝った作りは、見る度にため息が出るほどステキだ。マリさん(築山万里子さん)は「全然もうからない」と苦笑しながらも、「でも手は抜けない。私の中で譲れない。うちの一番の財産」と、ちょっと誇らしげに話す。

最初に手掛けたのは、写真家の津田直さん(42)が奥琵琶湖を撮った写真集「漕(こぎ)」(主水書房、2007年)だった。津田さんは北極圏やヒマラヤまでも旅して、目の前に広がる風景の、さらに奥の世界へと引き込むように写し撮る。本人は「どういう時に撮るかといえば、まぶたを閉じたい時に撮るんです。祈りたくなるくらい忘れられない時に」と語る。

大阪での、とある仕事で一緒になって、仕事終わりにおでんを食べに行った時のこと。

津田さん「本を出したくて印刷会社を探してるんですが……」

マリさん「一応うち、印刷会社ですけど」

津田さん「えっ、そうなんですか」

そんな渡りに船といった会話が始まりだった。かつて琵琶湖を行き来していたが、昭和30年代に姿を消した丸子船という帆掛け船の〝物語〟をたどった作品は、津田さんが個展のために撮ったものだったが、一冊にまとめたいと思うようになった。「船景(せんけい)」をキーワードに、船から見た湖面や松林、舟影などの風景写真と、湖と共に生きる人々の聞き書きなどは文章で――。「写真は印画紙を再現できる紙で、言葉は手触り感のある紙で、とイメージしてたんですが、違う紙が交ざると難しい。できないだろうと思ってたんです」

おでん屋での会話のあと、津田さんはマリさんに写真を見せた。その中に、闇に溶けた松林の上におぼろに懸かる月の写真があった。その一枚がマリさんの心を揺さぶった。悲しい記憶の中にある月と重なって、知らぬうちに涙ぐんでいた。

その表情の変化を見て、津田さんは思った。「マリさんは僕と共に船に乗ってしまった」と。写真の世界に引き込まれたマリさんが、作品集の印刷を引き受けたのは自然の成り行きというほかない。

津田さんの注文は紙だけではなかった。序文までの文字は活版印刷で、なぜなら丸子船が健在だったのは活版の時代だから。この頃、活版印刷は〝絶滅危惧種〟になりつつあったが、協力工場の片隅にあった古い機械を使い、さらに5種類の紙とオフセット印刷を組み合わせ、製本にもかなり手間がかかった。「こんな無理難題、引き受けるところはないでしょう」と津田さんまで苦笑する。「版元の主水書房の尽力もあり、互いに夜をまたぎながらやり取りし、暗闇の中での手探りでした」という本作りは、どこに行き着くかわからない船旅のようなものだったか。

ようよう完成にこぎ着け、送られてきた作品集を手に取って、津田さんは「震えるものがありました」と言う。黒いケースはマリさんが提案し、裏表とも黒い段ボールを探しに探して、ある倉庫で眠っているのを見付けた。そこに白いシールでタイトルを貼り付けてあった。本体の布張りの表紙は水色。「この物語の闇を表す黒に、闇夜に浮かぶ月の白。本をケースから引き出すと、水面が見えるわけです。本を手にした時から旅が始まる。想像を超えてました」

それまで、がむしゃらに目の前の仕事に突き進んでいたマリさんが、芸術的感性に目覚めた。文字通り、新たな航海へ漕(こ)ぎ出したのだった。

文・松井宏員 ― 撮影・山田尚弘、平川義之 ― デザイン・シマダタモツ